

## 雑誌『アサヒ・スポーツ』の小説欄（上）：スポ 根、ユーモア、そして戦争

波瀲, 剛  
九州大学大学院比較社会文化研究院准教授

<https://doi.org/10.15017/11039>

---

出版情報：九大日文. 11, pp.42-51, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 雑誌『アサヒ・スポーツ』の 小説欄(上)

—— スポ根、ユーモア、そして戦争 ——

MAKIKITA Toshihiko  
波瀾 剛

モダニズム文学とスポーツ。両者の接点を積極的に見いだし、今後の新しい研究視座を提供する中村三春の著書『修辭的モダニズム』(ひつじ書房、二〇〇六年)において、『新興芸術派結成の年として記憶される昭和五(一九三〇)年は、実にまた記念すべきスポーツ小説の年でもあった』(一九〇頁)という一節がある。

この指摘が直接的に示しているのは、新興芸術派の一人であった阿部知二が「日独対抗競技」をはじめとしてスポーツを題材とする小説を次々と発表し、また、雑誌『文学時代』や『新青年』において「スポーツ小説」と銘打つ特集を掲載したのが一九三〇年だったという点である。だが、その動きは一部の作家にととまらず、当時、『近代生活』や『改造』などの文芸誌においてもスポーツを扱った作品が多く登場していて、モダン・スポーツ文芸という潮流の象徴的な一年であったことも同時に示している。

中村の議論を要約すると、①運動競技に求められるスピード、観戦するという消費行為、肉体美の謳歌などがモダニズム文学

との親和性を獲得し、代表的な例として阿部知二のモンタージュ的文体による小説「日独対抗競技」が登場した、また、②一九三二年のロサンゼルス、一九三六年のベルリン・オリンピックにおける「日本人選手」の活躍と東京大会開催実現へ向けた機運の高まりのなかでスポーツ全般が国民の間に浸透していったことも、スポーツ小説の登場を後押しした、そして、③この傾向は詩よりも小説において顕著であり、一九二九年から一九三二年をピークとして、『文学時代』『近代生活』『新青年』『中央公論』『改造』『新潮』といった雑誌に種々のスポーツを題材とする小説が発表されるようになったということになるだろう。極端に短くまとめたが、スポーツ小説の存在をあらためて認識する機会となる重要な指摘であることは間違いない。

本稿もこのような問題意識を共有するものである。しかしながら、『修辭的モダニズム』においては、調査対象がいわゆる文芸雑誌であったことから、稿者には素朴な一つの疑問がわいた。すなわち、「文芸誌」のなかで「スポーツ」が浸透していたまさにその時期、「スポーツ誌」のなかでは「文芸」が浸透していたのかという疑問である。そこで、今回は『アサヒ・スポーツ』というスポーツグラフィック誌を手がかりに検討を試み、以下、調査途中段階ではあるが現状報告をするというのが本稿の目的である。

調査の対象とした雑誌『アサヒ・スポーツ』(朝日新聞社発行)は、一九二三年三月一五日に創刊され、一九四三年六月一日付で休刊するまで月二回発行された大型のスポーツグラフィックであ

る（その後、一九四八年一月一〇日に週刊として復刊、一九五四年一〇月一日からは月二回発行となり、一九五六年一月一日付でふたたび休刊している）。ほぼ全号所蔵しているのは秩父宮スポーツ博物館・図書館であるため、九州大学付属図書館所蔵分を参照しつつも、基本的には秩父宮スポーツ図書館所蔵分に依拠した。また今回の調査範囲は一九三〇年から一九三九年までの一〇年間に絞った。これは調査の時間的制約もさることながら、関心の出発点が一九三〇年以後の状況であったことによる。ただし、実際には一九三〇年の記事に目立ったものがなかったため、以下、一九三一年から一九三九年までの報告をつづる。

## 第九卷（一九三二年）

この年の特徴としては、年頭号において「スポーツ文芸」の募集が行われ、実際に記事が掲載されるようになった点を挙げることができる。しかし、後年に掲載される「スポーツ小説」とは少々趣が異なるので、確認のためにまず「スポーツ文芸芸集」を引用しておく。

本当にあつたこと、創作、翻訳の何れを問はず軟か味と興趣の動きを伴ふスポーツに関する短篇文芸作品を募集します、一篇の分量は四百字詰十枚を限度とします、誌上掲載の分には相当の謝礼をいたします、続々運動部宛御投稿ください。（二号、一月一日、二三頁、旧漢字は適宜改めた。以下同様）

右の文では、創作を募集するような趣旨になっているのだが、実際に掲載された文章は、「本当にあつたこと」と「軟か味と興趣」とを伴う作品と理解すべきものが多い。実在の陸上選手と思しき人物のエピソードを自らの経験を交えて描いた二編、田阿木正一郎「オリンピックツクヘ」（六号、三月一五日）と、鈴木武「不寝番Ｙとその兄」（二六号、八月一日は、ある意味で「創作」という部分を含んでいるかも知れない。だが、中村長「金曜日×一三日」（九号、五月一日、名和長也「仲間に入つた丈夫だ!!!」（二〇号、五月一五日）、朝弥生「痛い話」（二五号、七月一五日）の三編は大リーグのエピソード紹介に重点がある。また、世界記録と日本記録とでそれぞれの記録更新の度合いを計算すると一九四〇年には日本の陸上界は世界レベルに達するという論を展開する藤原秀重「何時世界一となるか?——数理から見た可能性——」（七号、四月一日）、肉体の鍛錬と清浄を「水」の宗教的意味合いなどから主張する日野三郎「スポーツと鬼」（八号、四月一五日）と、この年の『アサヒ・スポーツ』において、「スポーツ文芸」の意味するところはまだ確定していなかったことがうかがえる。

## 第一〇卷（一九三三年）

「スポーツ文芸」に関する記事はこの年一度だけ掲載される（都一「輝く三つの日章旗」九号、五月一日。これよりもむしろ注目に値するのは、「スポーツ小説」という語が登場した点である。

年頭号から三回（二号、三号）にわたつて山上雷鳥「スポーツ小説 招かれた客」が掲載される。その初回には「作者の言葉」（二号、一月一日、二八頁）という欄が設けられていて、次のような文章が見られる。

この一篇はスキー小説、または山岳小説の試作として筆を執つた。筋は「S. Copeland」の小品集「美しき山々」の中からヒントを得たが、事件は日本アルプスを舞台とする冬期登山の場面を中心として描いた。そして篇中に出て来る個々の山々も、すべて実在する山の個性を出すことに努めたが、その呼称に関しては故意に暗示的な表現法によつた。

近時わが国の文壇にもスポーツ文芸が云々されるに拘らず、真のスポーツマン・スピリットの躍如たる作品に接しないのは物足りなり感がする。といつて、本篇がさうした期待を以て迎へらるべきものでない事は勿論であるにしても、多少とも山男——特に若きアルピニスト——の心理描写、ないしテクニカルな点に特異な感覚が出てゐるとしたら作者の意図は叶へられた訳である。

「近時わが国の文壇にもスポーツ文芸が云々される」というくだりは、中村のいうモダン・スポーツ文芸の隆盛と興味深い一致を示す。したがつて、『アサヒ・スポーツ』における「スポーツ小説」の登場は、文芸誌における動向によつて促されたとも受け取れる。作者の山上雷鳥は、本名藤木九三といひ、当

時、『アサヒ・スポーツ』の編集に従事する朝日新聞社の記者であり、また登山家でもあつた。小説欄の一角に作者の言葉が挿入されていることもこうした経緯があつてのことだろう。

彼は後の一九三八年に同誌の編集長になる。後述するように、『アサヒ・スポーツ』において「スポーツ小説」欄が定着するのは一九三六年だが、最初のものが彼の手によつて生み出されていたのは単なる偶然ではない気がする。その意味では、彼の志向した「心理描写」や「テクニカルな一面の「特異」性が、同誌における「スポーツ小説」の方向性に少なからぬ影響を与えた可能性は考慮すべきであらう。

## 第一一巻（一九三三年）、第二一巻（一九三四年）

この二年間は、「スポーツ文芸」欄もなく、山上雷鳥の小説も掲載されていないが、創刊一〇周年で懸賞「スポーツ小説」を応募し、受賞作を断続的に掲載するという点で特徴がある。まず、一巻六号（一九三三年三月一五日）の「本誌創刊十周年記念 懸賞文画募集規定」（二九頁）を引用する。

創刊十周年を契機として本誌はその内容に一層の充実を計り研究に指導に批評にニユース写真の取材に新たなる意気込みをもつて相見ると、もに更に明朗にして新鮮なる興味あるスポーツ読物を提供するため今回広く一般からスポーツ小説ほか実話、漫画などを下記規定により懸賞募集す

ることゝしました、さきに五周年記念事業として行つた懸賞文募集の際には応募予想外の多数に上る盛況でありましたが、今回は更に多くの力作名篇を得て更正の誌上に錦上添花を添へたいと希つてゐます、待望久しき純スポーツ文学の新天地を開拓指示する生みの親としての意気をもつて奮つて応募されんことを希望します。

募集は甲乙丙の三類に分かれていて、甲類の小説に関しては、原稿用紙四〇枚〜六〇枚で、入選一編賞金三百円、佳作二編で賞金は各百円となつている。また乙類のスポーツ実話、スポーツ・ユーモアはそれぞれ原稿用紙一〇枚内外で、賞金は入選一編が五十円、佳作三編が各三十円。丙類のスポーツ漫画（二回打ち切り）と挿話（千字以内）は、入選三編で賞金各五十円。送りは大阪朝日新聞社運動部アサヒ・スポーツ懸賞係と記載されていて、締め切りは五月一日となつている。

この募集が掲載されてから五カ月後の一五号（八月一日）で当選者が発表される。応募は甲類で一三七編、乙類で二〇三編、丙類で二五一編あり、スポーツ小説部門は准一等二編、各賞金二百円、二等一編、賞金百円という結果になつている。当選作のうち、准一等の笠井民造「磯で拾つた男」（名古屋、柔道）は一巻一八号〜二〇号（一九三三年九月一日〜一〇月一日）、同じく准一等の中村久爾衛「漕手は意気に」（東京、ボート）は一巻二二号〜二四号（十一月一日〜十一月七日）、そして二等の鈴木英雄「カレヂ・ライフ」（東京、陸上）は一年ほど間隔を置いて

て一二巻二四、二五、および二七号（一九三四年一〇月一日、十一月一日、十一月五日）と順次掲載された。その間、実話、ユーモア部門の受賞作も掲載されている。

スポーツ小説の准一等受賞に関しては連載第一回目に作者の言葉が掲載されている。それらを見ると、「柔道なども少し普及性を持つて好いはずと常々考へてゐます」（笠井民造）、「ボートマン生活をした私に取つて大変書き良かった」（中村久爾衛）と、作者はそれぞれの競技経験者あるいは関係従事者であることが分かる。また、どちらも自分の身を賭して、ときには血を吐き、さらには生命を奪うような状況に置かれながらも勝利をめざす姿が描かれている。自ら従事する競技に関する、いわばスポーツ根性ものの内容は、肉體美を謳歌し、軽やかな文体で描かれたモダン・スポーツ文芸とは一線を画す性格を持つてゐるといえる。即断はできないが、藤木九三の志向した「心理描写、ないしテクニカルな点に特異な感覚」はこのようなかたちで方向づけがなされていたのではなからうか。

### 第一三巻（一九三五年）

この年は懸賞作の掲載も一段落し、目立つた記事は見られない。「物語」という語がついた記事はいくつか存在するが、「吉岡君の百米一〇秒三物語」（二七号、八月一日）、「水泳界の新人吉田喜一君物語り」（二三号、一〇月一日）と人物紹介欄になつている。「アサヒ・グラフ」の場合、ほかの年にも似たような人物

やエピソードの紹介で「物語」とタイトルをつけているので、特別な例ではない。

#### 第一四卷（一九三六年）以後

一九三六年から誌面が横書きから縦書きに変更された。この形式に関する大きな変化は内容面と無関係ではなく、この年以後、読物としての性格が強化されている。婦人欄やスポーツ小説欄が設けられ、編集後記も断続的に掲載されるようになった。こうした方針の変更について、四号（二月一日）の編集後記（三四頁）は以下のように述べている。

編集様式に大変革を加へて愛読者諸君にお目見えしてから早くも四号を重ねました、幸にその外延なり内包の大衆化に賞讃を博して号一号と発行部数を増大して行つてをることは同人一同の欣懐とするところであります、一層努力して読者諸君の期待に副ひたいと念願してをります、さらに御鞭撻御教授くださるやうに懇願いたします。

ベルリン・オリンピックの開催年に当たつて読者拡大を意図したことは十分推測できるが、ここでいう「大衆化」の一役を担ったのはユーモア作家である。辰野九紫がこの年から随筆を多く寄せているが、彼のほかにもサトウ・ハチロー、中野実、弘木丘太、獅子文六といった、一九三六年七月結成のユーモア

作家倶楽部の顔ぶれが、本稿の末尾に掲載したスポーツ小説欄の表に散見される。これは「大衆化」の路線変更によつて、創刊一〇周年の段階では分かれていた「スポーツ小説」と「ユーモア」の区分が融合することになったのだと考えられる。また見方を変えれば、ユーモア作家たちが旺盛な執筆活動の範囲をスポーツ誌に広げた結果だともいえるだろう。いずれにしても、スポーツ小説とともに現在ではあまり顧みられることのないユーモア小説の時代を感じさせる事実である。

一九三六年一月以後、小説欄はほとんど同じ場所を占めている。たいていは三二頁から三三頁の見開き二面で、ひと目で競技や内容が分かるような挿絵が中ほどに入り、一段二〇字の六段組で、分量は原稿用紙二〇枚程度だった。執筆者は、さきほど挙げたほかに、斉藤三郎、藤沢桓夫、水谷準（山野三五郎）、邦枝完二、石黒敬七、長沖一、深田久弥、田中純、和木清三郎、木々高太郎と、『日本近代文学大事典』で確認できる作家もいるが、そうでない場合も少なくない。稀には一四卷一号〜一三号のように、日本人初のプロテニスプレーヤーである佐藤俵太郎が試合の模様をつづる「物語」を掲載することもあった。だが、一七卷六号「愛犬白公之墓」を書いた柴田隆二が、一九三三年から雑誌『水泳』の編集長を務めていて、掲載時は前衛写真家でもあったという経歴などが判明したこと以外は依然として明らかでないことが多い。この点は今後も調査を続けたい。話題を競技に移せば、やはり野球がメインであるものの、陸上、水泳、登山、テニス、ラグビー、ボクシング、スキー、ス

ケート、アイスホッケー、相撲、柔道、乗馬など多岐にわたる。現在では人気のあるサッカーを題材とする小説は、当時はほとんど関心をもたれなかつたようで、一九三九年までの調査では存在しなかつた。

内容としては、競技者どうしの友情を描いたものや、恋愛がかかわるもの、あるいはウィットに富んだものが中心だが、一五巻二四号（一九三七年二月一日）の佐波岸太「甲子園勇士の父」からは、応召される兵士が登場するようになる。さらに同じ佐波岸太の小説「羊樹（ヤングス）の芽」（一七巻二三号、一九三九年六月一五日）「スケート序曲」（二七巻一九号、一九三九年二月一五日）では舞台が「満洲国」の首都新京（現在の長春）になつていて、時代性を帯びた内容もしばしば見られる。

このようにして今回掘り起こしを試みている小説群は、もはや顧みられることのない過去の遺物である。すでに忘れ去られた小説というのは、歴史の淘汰によって忘却されるべくしてそうなつたということは確かにいえる。その意味で各小説の完成度を評価することは困難かも知れない。しかしながら、同時代性を探るといふ視点から見ると、スポーツ雑誌において四年間で一〇〇編近くの小説が掲載されていたという事実は非常に興味深い。そうした思いもあつて、調査の途中段階にもかかわらず、現状をまとめた次第である。当然のことながら課題も多

く残されている。まず、戦争との関係については、一九四〇年から一九四三年までの小説欄の調査をすることでさらに明らかにする予定である。さらに、執筆者たちの経歴や、一九二三年から一九二九年までのスポーツ文芸登場にいたる経過を押さえ、今回の議論を補足していきたい。

なお、本稿末尾に掲載した表では、小説欄の掲載されない号が時々見られる。これはおもに全国中学野球や東京六大学野球特集であり、ここでは小説欄が設けられなかつたことに起因する。表にかかわる部分での欠号は一七巻一六号のみである（スポーツ図書館、九州大学ともに欠号であり、どちらも裏表紙の発行日等が記載された欄に号数をいったん塗りつぶして一七号と修正した形跡が残っている）、この号は発行されなかつた可能性が高い。また、表の最後に備考欄を設け、本文のタイトルには記載がなく、目次のみに「スポーツ小説」といった表記がある場合は、「スポーツ小説（目次）」等と記入しているので参考にされたい。

※ 本稿は科学研究費補助金「昭和モダンの生成にみる文化翻訳のポリティクス」（若手研究B、平成一九〜二〇年度、課題番号一九七二〇〇七八）による研究成果の一部である。

（九州大学大学院比較社文化研究院准教授）

## 『アサヒ・スポーツ』の小説欄(1936-1939)

巻号	発行年月日	タイトル	著者	頁数	種目	備考
14巻1号	1936年1月1日	巖ちやんとトロフイー	中野実	32-34	スキー	スポーツ小説
14巻2号	1936年1月15日	向陵秘話 凱歌は咽ぶ	芥藤三郎	32-33	野球	スポーツ小説
14巻3号	1936年2月1日	炬辺夜話	坂部護郎	32-33	スキー	スキー掌篇
14巻4号	1936年2月15日	微笑的な応援団長	サトウ・ハチロー	32-33	相撲・ラグビー	スポーツ小説(目次)
14巻5号	1936年3月1日	春はスキーに乗つて	弘木丘太	32-33	スキー	スポーツ小説(目次)
14巻6号	1936年3月15日	春のホームラン	藤沢恒夫	32-33	野球	笑ふ小説
14巻7号	1936年4月1日	精神(こゝろ)を知る者	平田健男	32-33	アイスホッケー	スポーツ小説
14巻9号	1936年4月15日	選手引き抜くべからず	吉村久夫	32-33	野球	スポーツ小説
14巻10号	1936年5月1日	その前夜	水谷準	32-33	野球	スポーツ小説
14巻11号	1936年5月15日	テニ動物語 無声の凱歌(上)	佐藤茂太郎	32-34	テニス	
14巻12号	1936年6月1日			40-42		
14巻13号	1936年6月15日			32-33		
14巻14号	1936年7月1日	社会人の場合	中根毅	30-32	陸上	創作
14巻15号	1936年7月15日	コーチ二筋道	辰野九紫	36-38	野球	スポーツ小説
14巻17号	1936年8月1日	地方予選補話	藤沢恒夫	28-30	野球	野球小説
14巻20号	1936年9月1日	聖火東へすゝむ	弘木丘太	28-30	陸上・水泳	創作
14巻21号	1936年9月15日	秋晴れ	佐波岸太	26-28	陸上	スポーツ小説
14巻23号	1936年10月1日	仇討騒動	水谷準	30-31	テニス・ゴルフ	スポーツ小説
14巻24号	1936年10月15日	根岸の場合	邦枝完二	30-32	野球	スポーツ小説
14巻25号	1936年11月1日	伯父さん	佐波岸太	30-32	野球	スポーツ小説
14巻27号	1936年11月15日	これも選手だ	サトウ・ハチロー	30-32	ラグビー	ラグビー小説
14巻28号	1936年12月1日	加古森博士乗馬史	弘木丘太	32-33	乗馬	スポーツ小説



14巻29号	1936年12月15日	銀盤日記	中西善三	28-30	スケート・アイスホッケー	スボーツ小説
15巻1号	1937年1月1日	春を握る 第一回	サトウ・ハチロー	38-40	野球	野球小説
15巻2号	1937年1月15日	第二回		30-31		
15巻3号	1937年2月1日	第三回		30-32		
15巻4号	1937年2月15日	組閣成るの日	長野九柴	30-31		ラゲビー小説(目次)
15巻5号	1937年3月1日	あぶら抜き	弘木丘太	30-32	ワラゾン	スボーツ小説(目次)
15巻6号	1937年3月15日	ハヤの錯覚	佐渡岸太	30-31	登山	小説(目次)
15巻7号	1937年4月1日	柔道異国奮戦記	石黒敬七	24-25	柔道	柔道異国武勇伝(目次)
15巻9号	1937年4月15日	天は晴れたり	獅子文六	30-32	野球	小説(目次)
15巻10号	1937年5月1日	フェア・プレー	長沖一	32-33	野球	野球小説
15巻11号	1937年5月15日	打倒(ノツクアウト)	水谷準	32-34	ボクシング	スボーツ小説(目次)
15巻12号	1937年6月1日	職業選手(ゾロ)も偷し	林利三	32-33	野球	野球小説
15巻13号	1937年6月15日	今は昔善れの失策	酒井真人	32-34	ワラゾン・柔道・飛込・野球	小説(目次)
15巻14号	1937年7月1日	赤ん坊と先輩	サトウ・ハチロー	30-31	陸上・水泳	ユーマア小説
15巻15号	1937年7月15日	河童日記	藤沢恒夫	32-33	水泳	小説(目次)
15巻17号	1937年8月1日	紅霞号敗戦録	佐渡岸太	32-33	ヨット	小説(目次)
15巻19号	1937年9月1日	赤字応援団	長野九柴	32-33	野球	野球小説(目次)
15巻21号	1937年9月15日	彼等の熱球	安達美知夫	32-33	野球	小説(目次)
15巻22号	1937年10月1日	チャンスとは	サトウ・ハチロー	32-33	野球	小説(目次)
15巻23号	1937年10月15日	テニスと鱈	弘木丘太	32-33	テニス	小説(目次)
15巻24号	1937年11月1日	甲子園勇士の父	佐渡岸太	32-33	野球・ワラゾン	小説(目次)
15巻25号	1937年11月10日	明日も勝とうぜ	サトウ・ハチロー	31-34	野球	小説(目次)
15巻26号	1937年11月15日	狙はれたトーチカ	長野九柴	32-33	ラゲビー	小説(目次)

15巻28号	1937年12月1日	試合は戦争だ	林利三	32-33	ラグビー	小説(目次)
15巻29号	1937年12月15日	人生走塁	長沖一	30-31	野球	小説(目次)
16巻1号	1938年1月1日	明日は晴れ	深田久弥	30-31	スキー	スキー小説(目次)
16巻2号	1938年1月15日	負けで勝つ	辰野九柴	32-33	相撲	小説(目次)
16巻3号	1938年2月1日	銃後のスポーツ	前田よわいち	32-33	陸上・水泳・野球	漫談(目次)
16巻4号	1938年2月15日	五つの手紙	サトウ・ハチロー	32-33	ラグビー	スポーツ小説
16巻5号	1938年3月1日	雪上の奇蹟	田中純	32-33	スキー	スポーツ小説
16巻6号	1938年3月15日	美沙子の場合	弘木丘太	32-33	陸上	スポーツ小説
16巻7号	1938年4月1日	主将(キヤプテン)の感傷	林利三	32-33	野球	スポーツ小説
16巻9号	1938年4月15日	投手は釣球で	逆井仁	30-31	野球	野球小説(目次)
16巻10号	1938年5月1日	祖父	山田早苗	32-33	陸上	スポーツ小説(目次)
16巻11号	1938年5月15日	九銃士	水谷準	32-33	野球	スポーツ小説(目次)
16巻12号	1938年6月1日	惨めな監督	和木清三郎	32-33	野球	小説(目次)
16巻13号	1938年6月15日	場内アナウンス	辰野九柴	32-33	野球	小説(目次)
16巻14号	1938年7月1日	トロツヅの想ひ出	長沖一	30-31	野球	小説(目次)
16巻17号	1938年8月1日	平泳屋(プレイストア)ピラテキ店	サトウ・ハチロー	32-33	水泳	小説(目次)
16巻19号	1938年9月1日	英雄廃業	弘木丘太	32-33	水泳	小説(目次)
16巻22号	1938年10月1日	山男が語る話	佐波岸太	32-33	登山	小説(目次)
16巻24号	1938年11月1日	応召	林利三	32-33	野球	スポーツ小説(目次)
16巻25号	1938年11月15日	ゾーさんの場合	弘木丘太	32-33	陸上	小説(目次)
16巻28号	1938年12月15日	冬晴れ日記	サトウ・ハチロー	32-33	ラグビー	小説(目次)
17巻1号	1939年1月1日	饒別	辰野九柴	32-33	ラグビー	スポーツ小説(目次)
17巻2号	1939年1月15日	源太と湯たんぼ	弘木丘太	32-33	スキー	小説(目次)

17巻3号	1939年2月1日	篠痕(シユヅール) 綺譚	佐波岸太	32-33	スキー	スボーツ小説(目次)
17巻4号	1939年2月15日	ヒユツツ異変	和泉勲	32-33	スキー	小説(目次)
17巻5号	1939年3月1日	甞る影法師	サトウ・ハチロー	32-33	野球	スボーツ小説(目次)
17巻6号	1939年3月15日	愛犬白公之墓	柴田隆二	32-33	水泳	炬辺夜話
17巻7号	1939年4月1日	新主将総親和	辰野九柴	32-33	野球	スボーツ小説(目次)
17巻9号	1939年4月15日	二人の選手	林利三	32-33	野球	スボーツ小説
17巻10号	1939年5月1日	或るパートナー 或るパートナー	弘木丘太	32-33	テニス	スボーツ小説(目次)
17巻11号	1939年5月15日	晦日記一週間	サトウ・ハチロー	32-33	野球	スボーツ小説(目次)
17巻13号	1939年6月15日	羊樹(ヤングス)の芽	佐波岸太	32-33	野球	スボーツ小説(目次)
17巻14号	1939年7月1日	ワラソノ野戦病院	小高吉三郎	32-33	ワラソノ	スボーツ実話
17巻15号	1939年7月15日	不参加勧誘事件	若林二十一	32-33	野球	野球大会夜話
17巻17号	1939年8月1日	父と子	上野芝人	32-34	野球	野球小説(目次)
17巻20号	1939年9月1日	メダルの秘密	山野三五郎	40-41	テニス	小説(目次)
17巻22号	1939年9月15日	野球魔王	木々高太郎	32-33	野球	小説
17巻24号	1939年10月15日	漂ぎよき者	弘木丘太	32-33	ラグビー	小説(目次)
17巻25号	1939年11月1日	ハンツ秘譚	辰野九柴	32-33	ラグビー	小説(目次)
17巻27号	1939年11月15日	選手とその母	林利三	32-33	ラグビー	小説(目次)
17巻28号	1939年12月1日	押せフロントロー	サトウ・ハチロー	32-33	ラグビー	小説(目次)
17巻29号	1939年12月15日	スケート序曲	佐波岸太	32-33	スケート	小説(目次)